

---

# 自分を僕と言う彼女は。

hagi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自分を僕と言う彼女は。

### 【Nコード】

N3728D

### 【作者名】

h a g i

### 【あらすじ】

主人公は入学式に仲良くなった、スーパーボーイッシュ女子に恋をしていく。鈍い相手、不器用な自分。青春の高校時代を描いたラブコメディ。

## プロローグ（前書き）

女の子がスーパーボーイッシュです。  
女子のかけらも会いませんので、気をつけて。

## プロローグ

桜の散る頃、オレはアイツに出会った。

「オレ、槇 伸太郎。」

なんとなく入学式に話しかけた隣のそいつは、特にオレに興味もなさそうにこう言った。

「……村瀬 浩。」

その素っ気無さが楽で、オレはもっと村瀬について知りたくなかった。

「数学は好きか？」

「好き。でも化学は出来ねえの。」

「そうそう！ オレもだ。」

村瀬とはとにかく気があった。好きなアーティストとか、食べ物とか。新学期が始まったその日、オレと村瀬は一緒に昼ごはんを食べた。

「オレ焼き蕎麦パン、好きだわー。」

「僕も。」

「あれ、村瀬。僕とか言うわけ。」

「……悪いか」

「別に。普通の一人称だし。でもなんか、意外だったんだ。」

村瀬は少し驚いたような顔をした後、いかにも面倒くさそうな顔を作った。

「お袋がさすがに……僕しか許してくれなくて。姉ちゃんが居るからいいじゃん、って感じた。」

姉ちゃんとは何が関係あるんだろうか、と思った。次の瞬間までは、そう思ってた。村瀬が次の瞬間、オレに衝撃的な言葉を言うまでは。

「僕、女の子扱いとか面倒くさくてさ。いくらモデルの姉が居るとしても……女も男も所詮人間なのに。」

そういえば男にしては綺麗過ぎる顔立ちだと思ったんだ。村瀬はそう、男子の制服を着た、れっきとした女子だった。

僕が私で。

女子?! 村瀬が? 聞いた瞬間俺の頭は真っ白になった。でも次の瞬間沸いたのは、こいつと友達でいたいって気持ちだった。

オレは、そんなに驚いた様子も無くこう言った。

「ああ、お前女子なの?」

すると村瀬はちよつと申し訳なさそうに俯いた。

「がっかり……したろ? 女子が男子の制服着てるとか、キモイよな」

その瞬間オレはそれを否定しないといけない気がした。

「んなことねえよ。女子の制服って動きにくいっばいし。つつか、

お前の姉ちゃんってモデル……なのか?」

「……!」

村瀬はあからさまに驚いたようだ。でもそこに突っ込まれたくないらしくすぐに体制を整えた。

「あ、ああ。自分で言うのもなんだけど、スッゲー綺麗。」

少し、見てみたくなった。

「にてんの、村瀬に」

興味本位で聞いてみたら、怒られた。

「ゼンツゼン、全くもって似てねえ!」

ベリーショートだから、制服だと常識観と一緒になって男子にしか見えないが、こいつも相当綺麗な顔立ちをしている。きつと姉ち

やんもこのタイプの綺麗さなのだろう。

そしてきつと村瀬は、姉ちゃんが好きだ。姉ちゃんの話をするとき村瀬はすごく楽しそうで、オレは今まで味わったことの無い不思議な感情に包まれた。

村瀬のスカート姿が見てみたいと思った。

## プロローグ（後書き）

ありがとうございました。

次回でもお会いできることを祈っております。

男扱いされたい訳じゃない。  
(前書き)

新学期翌日の話。



男扱いされたい訳じゃない。

新学期、衝撃の出会いをした翌日。オレはせっかくの休日を潰さなくてはならなくなった。

「だ……だるい。」

……と、言うのは、オレの家は、マンションの大家をしているからだ。そのためオレは今日マンションに越してくると言う住人のため引越しの手伝いをしなければならなくなった。

いくら忙しいからと言ってオレだけが出向くって、どうよ。意味わかんね。まあ、昔からオレの両親なんてそんなもんだから、なれた。

そんなことを考えているうちに、どうやら例の住人が越してくる部屋の前に着いたようだ。奥さんらしき人に声をかける。

「ちわ。手伝い着ました。大家の槇です。」

愛想のいい奥さんは、飛び切りの笑顔だ。

「ああーら。可愛い子ねえ！ 私、村瀬です。」

村瀬か。不意に同じ名前のアイツの顔が浮かんた。村瀬さんの後ろには、娘さんが二人。と、その一人が前に出た。

「槇?!」

「む、村瀬えええ?!」

なんと、ご本人、村瀬      ここに村瀬さんは三人居るが      村瀬

浩「むらせひろ」。

「何お前、ここに越してきたわけ?」

「ここって、槇が大家してんの?」

「つつか、お母さん、オレ、同じクラスの槇 慎一郎「まきしんいちろう」です!」

「どうしようどうすれば。」

あああああ! 何で村瀬が?! まあいいけど! むしろ大賛成だけとお! あまりに噛み合わないオレ達の会話に嫌気が差した

か、奥さんのとめが入る。

「あんた達、会話が噛み合っていないわ。」

「どうかよろしく……あ、すみません。」

「どうしたらベストを尽くせ……あ、はい。」

あまりに急な展開に、オレも村瀬も頭真っ白だ、と。

「くすくすくす」

……何だこの、鈴を転がしたような声は。

「くすくす、ふふつ。」

奥さんの後ろから聞こえる、少女のような声。すると村瀬があらさまに嫌そうな顔をする。

「姉ちゃん。そのくらいにしろよ。」

姉ちゃん……とな。

「だって、浩ちゃん、面白いんだもん。どうしたらどうすれば、しか言っていないし。」

背の高いその姿がオレの目の前にあらわれた。

「モデルの、村瀬 涼（むらせりょう）……？」

村瀬 涼は、現役T大生で、かつ大人気のモデルだ。

「その通り。」

その通りって。もう突っ込むと言うより、

「さささ、サインくださあああいい！」

そのときオレって馬鹿だから、気付いてやれなかった。村瀬はオレに、助けを求めてたのに。

「あら、槇君。浩が居るのにいいのお？」

と言うのは奥さんだ。いや、良くないけど、良くないって……？  
ん？ それってオレ、いやちょっと待て、でもその会話って村瀬、嫌なんじゃねえの？

そうなのか。それって軽く何か、傷付くっつか。と言うかその前にオレ達力レカノと勘違いされてないか？ それってオレがどうか言っより、村瀬のためにも否定しないと。

「や、オレ達男同士のダチみたいなもんっすから！」

焦ってるとかつこ悪いから、精一杯落ち着いてみる。自分で言うてちよつと嫌な気分になった。

と、後ろで聞こえる声。村瀬のものだけど、それは小さくて、何て言っているか分からない。

「え、何、村瀬。」

「……に、」

「え？」

オレに一瞬だけ見えたのは、その大きな瞳に溜まった涙。

「別に、男扱いされたい訳じゃない。」

そう聞こえて村瀬が走り出すまで、オレにはスローモーションに見えた。何だよ今の。オレなんか間違ってた？ でも今はそれどこじゃないよな。

オレは後ろに居る奥さんを見据えた。

「すみません、オレ、追いかけます。絶対仲直りしてきます！」

気が付くと俺は、必死で村瀬を追っていた。

奥さんには必死で浩追っていく少年は、それはそれは浩にふさわしく思えた。

「ねえ、涼もあんな子、早く見つけなさいね。」

「待てよ！」

「ついてくるな！」

意外とすばしっこいそれは、オレの手をいとも簡単にすり抜けていく。もう、何回同じ事を繰り返しただろう。

何でだよ。どうしてお前はそうなんだ。そもそもどうして泣いていたのか、俺には予想も付かない。

もっと気にかけていれば。こうなる前に……そういや、アイツがこうなったのって確か、オレが涼さんにサイン求めた……後？

その後は簡単だった。オレは素直に思ったことを口に出していた。「何で……どうして涼さんと自分を比べてんだよ！」

村瀬の足が止まる。

「ちが……う」

その隙にオレは村瀬の腕を掴んだ。

「ちがくないだろ！」

掴んだ腕が、強く振り払われたが、めげずに反対の手を優しく、強く握った。

「ちがうって！」

「ちがくないんだよ！ お前は村瀬 浩だろ？！ 昨日オレと話してくれた奴だろ。……オレの、友達になる奴だろ！」

「！」

村瀬の目が見開かれた。

「今日知り合った有名人じゃねえだろ。」

「……うん」

一方的に掴まれた手が、握り返される。

「帰ろう。」

「うん。」

村瀬を追いかけて川辺まで来てしまったオレ達はオレンジの光に包まれながら帰った。奥さんが繋がれたままの手に妄想を膨らませたのは後日談として語られることとなる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3728d/>

---

自分を僕と言う彼女は。

2010年10月9日03時26分発行